

李白『早発白帝城』の作詩背景について

—特に詩語“猿声”との関連において—

秦 耕 司

一. はじめに

古今の絶唱として夙に名高い李白の七言絶句『早発白帝城』は、その作詩年代に諸説あって、未だ帰するところを知らない。最も有力な説、と言っても単に支持者が多いというだけのことであるが、それは李白五十九歳の時の作とする説である。即ち永王の乱に参加したかどで、流罪の身となって夜郎に流される途中、巫山の近くで赦免に遇い、白帝城から三峡を下って江陵まで還った時の作であるとするものである。論拠となっているのは、詩中に用いられている“還”と“輕舟”であるが、“還”は他の説の論拠ともなっており、“輕舟”は、三峡は急流で舟足が速いので、作詩の背景に喜び事があれば、誰しも軽快な気分になるのは自然であるから、これとて他の説の論拠となり得るものである。とすれば、いずれの説を採るにしろ、それぞれ語句面での論拠はなくなることになり、この七絶の作詩年代に関しては、「作品全体のまとまりのよさ」¹⁾とか、「その措辞の流暢さ、その水際立った発想」²⁾といった高い次元からの判断を待つしかないことになってしまう。

筆者は文学の専門家ではないので、文学的感覚や知識は正直言って乏しい。そこで小論では、作詩年代との関連では、従来全くと言っていいほど

李白『早発白帝城』の作詩背景について

注意されていなかった詩語としての“猿声”に焦点を当て、猿の習性という側面からと、言語表現の面、つまり“猿声”の述語である“啼不住”が“已”と併用されている点に着目し、“猿声”に新しい解釈を下して、五十九歳赦免説に結び付け、その他いくつかの言語表現の面から、上記二つの識見に具体的に近づいてみようと思う。“猿声”に対する新しい解釈が可能であるとすれば、他の語句、例えば“辞”“白帝”や“還”“江陵”なども、当時の状況に照らして見れば、そこに託されている李白の喜びの心情が、新たな視点から浮かび上がってきて、“兩岸猿声啼不住”との心情対比が鮮明となり、詩全体が生き生きとしてくるのである。

最初に詩の全文を掲げておくことにする。

李白『早発白帝城』

朝辞白帝彩雲間	朝に辞す白帝彩雲の間
千里江陵一日還	千里の江陵一日にして還らん
兩岸猿声啼不住	兩岸の猿声啼いて住まざるや
輕舟已過万重山	輕舟已に過ぐ万重の山

二. 作詩年代について

本論に入る前に、作詩の背景に関する諸説を、『校注・唐詩解釈辞典』³⁾を基に、一通り眺めておくことにする。

A説：早年、作者がはじめて故郷の蜀を出て三峡を下った時の作品。⁴⁾

“還”は韻字。舟は川を往来しているので、帰りの舟と考えることもできる。

全体にみなぎる力感。

郷愁。悲しい猿の声はノスタルジーを感じる。

B説：晩年、永王の乱に加担したことから、罪を得て夜郎に流される途中、赦免に遇って三峡から江陵に帰る時の作品。⁵⁾

“還”。

一瀉千里，いかにも壮快な調子。

“輕舟”で瞬時に千里を行く——赦免された時の喜びを表す。

C説：安陸時代（27歳ころより約10年の間）。⁶⁾

“還”。

江陵は李白の妻許氏の実家のある所。安陸を立身の地として最初に漫遊した頃、初めて蜀を出た時を回想して書いた。“早発”は、“当初出發”の意。詩題より回想の感じがある。

この辺りで読まれた詩が多く、全国の名山という名山上に登っている李白であるので、このころ巫山に登ったと見るのが穏当。その還りの作の可能性が大きい。

D説：開元年間、二度目に蜀を出て、安陸の家に帰った時の作品。⁷⁾

“還”。

E説：いずれの時期とも特定できない。⁸⁾

李白の判明した生涯のうちで、確実に白帝城を通ったとなし得るのは、A、B二件であるということを示すに過ぎない。“還”一字では決めかねる。

今これらの説を一つ一つ検討するつもりはない。各説の論拠を見れば解るように、複数の説にまたがっているものもある上に、いずれも決定的な論拠とは言えないからである。それらの論拠は、この小論が進むにつれて自然に淘汰されるであろうし、小論にとっては、従来各説の論拠となっていた“還”や“輕舟”でさえ、他の語句と同様に、二次的な位置付けにしなければならないことが了解できるであろう。この詩において最も重要な語は“猿声”である。この“猿声”を中心として李白の思いは、僅か四行の詩の中において、現在から未来へ馳せ、そして過去へと引き戻され、最後に再び現在に還っているのである。従って小論では先ず、“猿声”から検討を始めることにしようと思う。

三. 詩語“猿声”について

松浦友久氏⁹⁾によれば，“猿声”が悲哀など一定の感情や情緒を表す詩語としてほぼ完成したのは、六朝後期であるという。この“猿声”は唐詩でも多用され、李白も例外ではない。

『涇川送族弟錡』

望極落日尽	極を望めば落日尽き
秋深暝猿悲	秋深くして暝猿悲し
寄情与流水	情を寄せて流水に与うるも
但有長相思	但だ長相思のみ有り

『春陪商州裴使君遊石娥溪』

淹留惜将晚	淹留将に晩んを惜しみ
復聴清猿哀	復た清猿の哀しきを聴く
清猿断人腸	清猿人の腸を断ち
遊子思故郷	遊子故郷を思う

『留別龔處士』

我去黄牛峽	我黄牛峽を去り
遙愁白帝猿	遙かに白帝の猿を愁う
贈君卷施草	君に贈る卷施草
心断竟何言	心断ちて竟いに何をか言わん

『全唐詩』に収める李白の詩は963首、その内サルの語を用いた詩は62首67語である。それらが悲しみを表すどのような語と併用されているか、その内訳を見ることにしよう。

	悲	愁	哀	涙	断腸	優心	文脈	不明	その他	計
猿	6	8	4	1	4	1	18	10	6	58
猩猩	1						1			2
猿		1					1	1	1	4
猿							2			2

・『早発白帝城』の“猿”は除いてある。

表中最上段の項目欄で「文脈」とあるのは、“碎客心”“催白髮”“孤”“勞苦”など愁いや悲しみ、嘆きなどの間接的な表現で、用例数も少なく項目として立てるには繁雑になるもの10語。詩中には悲しみを表す特定の語句は用いられていないが、詩題に“送”や“別”の用いてあるもので、離別や別れ主題としているもの12語である。「不明」とあるのは、悲しみを表すのかはっきりとは解らないが、詩の解釈如何によっては悲しみを表していると採れるものである。「その他」の欄は、初めて白猿を目にしたこととか、ある地方へ赴任する人に贈る詩で、当地には猿が多いことを語ったものなどで、啼いていないのが6例、他の1例は絵を見ての感想であり、悲しみの心情とは関係のないものである。以上、李詩の用例は全部が全部「猿の声」即「悲しみ」というわけではないが、その大半が悲しみの心情と関連あること、三峽地帯を背景とした詩7首8例の内、「不明」2例を除いても6例全部が悲しみを背景としたものであることからすれば、『早発白帝城』の“猿声”は、悲しみを表す詩語と見るのが自然ではあるまいか。少なくとも一度は悲しみの表現として考察を加えてみるべきであろう。それは松浦氏の考証からも窺えるように、“猿声”が悲しみを表す詩語として成立した背景には、外ならぬこの三峽地帯の猿もその原因の一つとなっているからでもある。典拠となっている『水経注』や『荊州記』の記事、そこに引用されている“漁者歌”，および“断腸”の語源となった『世説新語』に見える母子猿の説話などは、すでに多くの注釈書によって紹介されているので、広く知られていることではあるが、煩を厭わずここで今一度引用しておこう。

常有高猿長嘯属引凄異，空谷傳響哀轉久絶，故漁者歌曰巴東三峡巫峡長，猿鳴三声淚沾裳。（『水経注』卷三十四）

常に高猿の長嘯する有り。属引凄異にて、空谷に傳響し哀轉すること久しくして絶ゆ。故に漁者歌に曰く、巴東三峡巫峡長し、猿鳴三声涙裳を沾す。

桓公入蜀，至三峡中，部伍中有得猿子者。其母縁岸哀号，行百余里不去，遂跳上船，至便即絶，破視其腹中腸皆寸寸断。（『世説新語』黜免）
桓公蜀に入る，三峡中に至るに、部伍の中に猿子を得る者有り。其の母岸に縁りて哀号し、百余里を行きて去らず、遂に船に跳び上りて、至れば便ち即絶す。其の腹の中を破りて視れば、腸は皆寸寸として断えたり。

このように見てくると、詩語“猿声”を生んだ風土——三峡を背景とした『早発白帝城』の“猿声”について、悲しみを表す詩語の視点からの言及が全くと言っていいほどないというのは、不可思議と言う外ない。実際、この“猿声”を悲しみもしくは哀愁の表現としてとらえているのは、作詩年代A説を主張する石川忠久氏¹⁰⁾ および作詩年代を特定しない延原大川氏¹¹⁾のみである。B説の支持者たちは、いずれも異口同音に「三峡地帯は野生の猿が多い」という事実を挙げるに留まっている。もちろん上述のように『水経注』や『荊州記』の記事を紹介引用する注釈書は、決して少なくないし、たまたま「悲しそうな猿の声」と述べる注釈書もないことはない。しかしどれをとってもそれ以上の言及はない。この七絶を喜びの心情を表している詩であると見なし、『水経注』などの記事を引用する以上は、その悲しそうな声か、喜びを表す本詩においてどのような意味があるのか、当然何らかの説明があって然るべきであろう。ところがそれを説明するものは、筆者の知る限り皆無である。中にはこの“猿声”は悲しみとは関係ない¹²⁾と、断言するむきすらある。思えば極めて奇異な現象と言えよう。

C説とD説は、いずれも暫く旅に出ている、久方振りて妻に会う喜びを詠った詩であると見ているから、悲しみとは無縁であると見なしているであろう、“猿声”への言及はない。

ここで石川氏の説¹³⁾を紹介しておこう。氏は“猿声”を郷愁の表現であるとする。李白は二十五歳の時に初めて山国の故郷蜀を出て、中国の中心地中原へ向かう¹⁴⁾。白帝城は蜀の出口である。ここを出発すれば一気に江陵まで行くことができる。朝焼け雲に浮き立つ心で三峡を下っていると、両岸からは悲しそうな猿の声が聞こえてきて郷愁を誘われる。故郷と別れるに臨んで、後髪を引かれる思いを“猿声”で表したのである。

しかし、後髪を引かれる思いを表すとすれば、舟は遅々として進まぬ表現こそ相応しい。詩全体からくるスピード感とは矛盾しよう。もちろんスピード感によってその思いを振り切らんとする心情を表しているとの解釈も可能である。“猿声”の述語“啼不住”は「いつまでも啼きやまない」意であるから、どんどん舟が下って行くのに反比例して、どこまで行っても郷愁の念を振り切ることはできないと解せよう。前半の二句では旅への期待感。スピード感とみなぎる若さ。転句では一転して強い郷愁の念。故郷に残っている人への思い。しかしそうすると、期待感と郷愁というこの二つの心情を、結句ではどう統括しているのだろうか。三峡を下っている間中脳裏を占めていた郷愁の念は、万重の山を通り抜け新天地中原へ出た途端にプツリと切れたというのだろうか。長時間に亘って郷愁の念に取り付かれていた転句からすれば、結句は手のひらを返したように余りにもあっけなくて、余韻さえ残らない中途半端な終わり方になってしまう。それに“猿声”は離別の悲しさにも用いられているのは事実であるが、述語を“啼不住”とする限り、前半二句の希望に満ちた心の高ぶりが強過ぎて、極めてチグハグな感じがするのを否めない。

筆者は、“猿声”は悲しみを表す詩語であるという考えを持っている。と同時に五十九歳赦免説を支持するものである。最初の二句では、赦免による喜びを表す浮き立つ気持とスピード感。第三句では、一転して悲しみ

李白『早発白帝城』の作詩背景について

を表す“猿声”。しかも述語が“啼不住”であるところからすれば、悲しみの心情はかなり深いと言わねばならない。一見して矛盾と解るこの解釈は、どのように考えればよいのであろうか。それを解消できる解釈はないことはない。回想である。それは、両岸で啼いている猿の声を耳にしていると、昨日まで悲しそうに啼いていた“猿声”が脳裏に蘇ってきて、現実の猿の声とダブリ、それがだんだんと片隅に追いやられて、遂には全面的に回想の“猿声”にとって代られて行く、映画でよく見るあの回想場面であろうか。筆者も最初はそう思っていた。ところが事実はそうではない。何故なら、李白が軽舟に乗って三峡を下っている時には、両岸に生息している猿は、採食や午睡に余念がなく、啼いてなどいなかったからである。以下この点について考察を加えてみよう。

四. 猿の啼く時間帯

“猿声”に関しては、今一つ見落とされていた点がある。それは猿の啼く時間帯である。生物学者¹⁵⁾によれば、猿が啼く時間帯は一定しており、昼啼く猿は夜啼かず、夜啼く猿は昼には啼かない。そしてそれは種類によるという。三峡地帯の猿はどうであろうか。先ず『水経注』（『荊州記』もほぼ同じ）に見える三峡の記事から見ていこう。

每至晴初霜旦林寒澗肅，常有高猿長嘯屬引凄異，空谷傳響哀轉久絕。
晴初霜旦に至るごとに林寒く澗肅とし、常に高猿の長嘯する有り。屬引凄異にして、空谷に傳響し、哀轉すること久しくして絶ゆ。

この記事からは、晴れた霜の降る朝に啼くこと、“久絶”とあるから“久”の長さは暫くおくとして、朝の内に啼きやむことが解る。唐詩の用例を見よう。

『竄夜郎於烏江留別宗十六環』

白帝曉猿断　　白帝，曉猿断え
黄牛過客遲　　黄牛，過客遲し

また三峡地帯に生息していた“猿”が、R・H・ファン・フーリク氏の考証通り、アジルテナガザル（*Hylobates agilis*）¹⁶⁾であるとすれば、この猿は朝と夕暮れ時に15分から30分くらい鳴く¹⁷⁾という習性を持つ。唐詩の用例を見よう。

『自巴東舟行經瞿唐峽登巫山最高峰晚還題壁』

江寒早啼猿　　江寒くして早く猿を啼かしめ
松暝已吐月　　松暝くして已に月を吐く

これは夕方になって寒いので、いつもより早く猿が啼き始めたことを述べたものである。

以上の二例からすれば、三峡地帯の猿は *Hylobates agilis* の鳴く時間帯と一致する。ところが唐詩に見る猿は夜啼くものが多い。

『襄陽歌』

襄王雲雨今安在　　襄王の雲雨，今安くに在りや
江水東流猿夜声　　江水は東に流れ，猿は夜声く

『別東林寺僧』

東林送客処　　東林客を送る処
月出白猿啼　　月出でて白猿啼く

『宿巫山下』

昨夜巫山下　　昨夜は巫山の下

李白『早発白帝城』の作詩背景について

猿声夢裏長　猿声，夢裏に長し
 桃花飛淥水　桃花，淥水に飛び
 三月下瞿塘　三月，瞿塘に下る

これは唐詩に先行する六朝詩の猿が夜啼く猿であったこと、猿の声が悲しみと結び付いたことなどによるものと思われるが、いずれにしる昼啼く猿は、他の詩人に僅かに用例を見るのみで、李白の詩、特に三峡地帯の猿にはない。李白の詩から、時間帯との関連で、啼く猿に関する一覧表を掲げておこう。

	夜	晩	暝	月	曉	星飯	不明
猿声	4	3	1	2	1	1	13
啼	1	1	1	6			3
嘯	1	1		2			1
鳴				1			2
叫		1		1			
吟							1
啾啾	1			1			
計	7	6	2	13	1	1	20

- ・『早発白帝城』の“猿”および啼き声のない猿（内16例）は除いてある。
- ・“猿”以外には“猩猩”2例（啼：晩、不明）が含まれる。
- ・動詞がなく“猿”のみの例は“猿声”に含めておいた。
- ・“晩”には“日夕”など他の語句が2例含まれる。

「不明」は文字通り不明であるが、『秋浦歌』や『贈武十七諤』に見るように、悲哀、悲痛の背景のものが多い（14例）こと、『観元丹丘坐巫山屏風』のように絵に描いてある猿（2例）を見ての回想などで、はっきりと昼間であると判断できるものはない。中でも三峡の猿は、8例中夕暮れが1例、夜4例、早朝1例、絵中の猿1例、実際にその時その場で啼いているのではない猿（“遙愁白帝猿”）が1例であるから『早発白帝城』の“猿声”もその線上で考えなければならないだろう。A説の根本的な欠陥は、この猿

の啼く時間帯を考慮していないところにあった。

以上、古典の記述と猿の習性および唐詩の用例からすると、『早発白帝城』の“猿声”が日中絶え間なく啼いていたとは、到底考えられないであろう。むしろ李白が三峡を下っている時には、猿は啼いていなかったと見る方が事実に近いのではあるまいか。啼いていたとしても、せいぜい早朝日出前後の15分から30分くらいに過ぎないのである。それにも拘らず“兩岸猿声啼不住，輕舟已過萬重山”と、三峡を通り過ぎるまで“猿声”を耳にし続けていたと表現した李白。それは何故だろうか。この矛盾を解消できる解釈は唯一つ。回想とする以外にない。“猿声”を回想とするのは“疊嶂憶清猿”（『朝下過廬郎中敘旧遊』）の例からして、決して筆者の突飛な思い付きではないことが了解できようし、加えて、山水画を見ての感想を述べた詩『同族弟金城尉叔卿燭照山水壁画歌』の“祇將疊嶂鳴秋猿”などと併せて見れば、高く険しい山々は“猿声”の連想を誘うものであることが窺えるのである。“万重山”は、或は“疊嶂”を念頭に置いての表現であるかも知れない。それは李白が本詩を作るに当たって下地としている『水経注』もしくは『荊州記』に、七百里に亘る三峡の兩岸の山々を“疊嶂”と表現してある¹⁸⁾からでもある。

今下っている三峡は、昨日までは流罪地夜郎に向かって何日もかかって上ってきたところである。五十九歳という高齢になってから、辺鄙な所へ流されたら、生きて再び都へ還る事は不可能であろう。それは先人たちの事例を見れば明らかである。恩赦の望みを持ちつ、進むことに極力抵抗を重ねてきた流罪の旅も、いよいよ最大の難所三峡へとさしかかった。この難所を通り過ぎれば、流罪地はぐっと近くなる。夜郎に近づくにつれ、日毎に重い沈んだ気持になる李白にとって、夜毎に停泊する所で悲しそうな猿の声を耳にすれば、悲痛な気持ちは募るばかりである。場所はあたかも急流で難所の多い三峡である。舟は足取りも重く遅々として進まない。一途に赦免を待ち望みつつ、殊更ゆっくりと行程を進めて来た李白。期待の“金雞”（『流夜郎贈辛判官』）もむなしく、とうとう巴水も過ぎてしまっ

李白『早發白帝城』の作詩背景について

た。今舟が遅々として進まないのは自分の意思に因るのではない。三峡の地勢が足取りを重くしているのである。人生にとって何が辛いかと言えば、逆境にあって先の見えない時ほど辛いことはない。急流の“巴水”も“忽可尽”であるのに、何故“青天”は“無到時”なのだろうか。そう詠う次の詩は、李白のほぼあきらめかけている心情を表しているかのようである。その後の句では、足取りが一層重くなっていることが、それを物語っているよう。

『上三峡』

巫山夾青天	巫山，青天を夾み
巴水流若茲	巴水，茲の若く流る
巴水忽可尽	巴水，忽と尽くす可きも
青天無到時	青天，到る時無し
三朝上黄牛	三朝，黄牛を上り
三暮行太遲	三暮，行くこと太だ遅し
三朝又三暮	三朝，又三暮
不覺鬢成絲	覺えず鬢，絲と成る

一度はあきらめた恩赦。それが三峡もほぼ終り近くまで来た所でやっと赦免となって、今その三峡を引き返しているのである。昨日までの境遇や心境に思いを致しながら、兩岸に連なる“疊嶂”を眺めていると、耳元にあの悲しそうな“猿声”が蘇ってきて、李白は一層感慨に耽るのであった。

しかし“猿声”が回想によるものであることは、猿の習性から発展して、唐詩では猿が夜啼くことが判明したからというだけではない。三句、四句の言語表現だけからでも、そのことは論証できるのである。それは「いつまで経っても～し終らない」という客観的な長時間を表す「動詞+不+住」と、「すでに（～し終えた）」という主観的に短時間を表す副詞“已”という二つの矛盾した語句が併用されているからである。そしてこの矛盾した

語句の併用こそ、最もよく李白の喜びの心情が表れているところなのである。次にこの点について見ていこうと思う。

五. “啼不住”と“已”

第三句の述語部分には、“啼不住”と“啼不尽”という文字上の異同があるが、この違いについては、これまでほとんど注意されていない。“啼不住”“啼不尽”のいずれにも、大きく分けて双方に共通する二通りの説があって、こちらの論争には激しいものがあるにも拘らず、ことこの文字上の違いについては、「意味的に違いはない」と言うだけで単に文字の異同があることを指摘するだけの注釈書が多い。このような現象は、本詩を解釈したり鑑賞する上で、いずれも大差はないとの認識によるものと思われる。確かに両者の違いは、せいぜい断続的に啼いているか、連続的に啼いているかという程度に過ぎないであろう。しかし問題はそんなところにあるのではない。重要なのは“啼不住(尽)”と同じ線上で“已”が用いられていることである。“啼不住”にしる“啼不尽”にしる、「いつまで経っても啼き終らない」という長時間経過しても終了しない意味を表している。ところが“已”はそれらとは反対に、すでに終了している意味を表している。三句と四句のキーポイントは、この矛盾する語句を併用しているところにある。“啼不住(尽)”の解釈が二つに分かれる原因はここにある。そしてさらに重要なのは、この矛盾が解消できるか否かであるが、それは“猿声”が実際に啼いている声であるか、それとも単に脳裏に響いている声であるかという点が一つ。それと“住”および“尽”の基本義によるのである。“啼不住”と“啼不尽”の違いもここから明らかになってこよう。便宜上“尽”から見ていくことにする。

“尽”は「ことごとく、つきてなくなる」の意である。

1. 主語を受けて動詞の修飾語となる。「ことごとく全部」

古木尽入蒼梧雲　古木尽く入る蒼梧の雲　(『梁園吟』)

万里尽黄雲

万里尽く黄雲

(『送崔度還吳。度故人礼部員外郎国輔之子』)

2. 動詞として述語になる。「つきてなくなる」

力尽功不贍

力尽きて功贍わず

(『古風四八』)

山随平野尽

山は平野に随いて尽き

(『渡荆門送別』)

孤帆遠影碧空尽

孤帆遠影碧空に尽き

(『黄鶴楼送孟浩然之広陵』)

3. 動詞に後置される。「～しつくす」

泣尽繼以血

泣き尽きて繼ぐに血を以てし (『古風三四』)

楊花落尽子規啼

楊花落ち尽くして子規啼く

(『聞王昌齡左遷龍標遙有此寄』)

千金散尽還復来

千金は散じ尽くさば還た復た来たらん

(『将進酒』)

万壑度尽松風声

万壑度り尽す松風の声

(『憶旧遊寄護郡元参軍』)

いずれも分量的に多いこと、時間的経過の長いこと、もしくは距離的に長いことの意味を含んでいる。詩中に見る“兩岸猿声啼不尽”の“尽”は「3」で“不”で否定しており、動詞が、主語が複数であることを前提とする“散”や“落”とは違う“啼”であるので、猿の数には関係なく長時間経過しても終ることのない意味を表しており、基本的には次のような解釈となろう。

(イ) 個々の猿にしろ群れを成した猿にしろ、同じ猿がいつまでも啼き続けてやまない。

ところが舟は速いスピードで川を下っているので、この解釈には明らかに無理がある。背景からすれば“啼不尽”は間接的には距離の長さをも表しているのです、次の解釈が可能となる。

(ロ) 舟は川を下っているが、どこまで行っても“猿声”が尽きることなく続いている。

ところが次の第四句に“已過”とあるために、それとの整合性を考慮に入

れると、今度は（ロ）説に無理が生じることになる。それで目に触れることのできる注釈書は、表現上の違いはあるにせよ、いずれも基本的にはこの二説の内のどちらかに帰すような解釈となり、一長一短の論争が続いているのが現状であるといえよう。それぞれ詩文に沿った解釈（訳）を挙げておく。

（イ）ひとしきりの啼き声（一声）がやまぬ内に

（ロ）絶えず啼き続けている間に

周知の通り、当時三峡地帯には野生の猿が沢山生息していた。その兩岸の山々は、白帝城から南津関まで約二百キロに亘って続いており、舟は川を下っているから、余韻として耳に残った啼き声までも含み、多少の誇張表現は認めるとしても、（イ）説は甚だ事実と反していよう。誇張表現は「白髪三千丈、緑愁似箇長」のように、ある心情を表現する場合にこそ効果が上がるのであって、単に舟足の速さを述べるためだけの表現であるとすれば、表現と内容の間に著しくバランスを欠くことになる。この詩のどこを見ても、李白が舟足の速さに驚いている様子を窺うことはできないのである。もし舟の速さで喜びの心情を表すとすれば、舟が軽快に走っている持続感が出るように、その様子を描写する方がより効果も上がるであろうし、「ひとしきり啼き終らない内に」というのではあまりにもあっけなくて、いくら気持がはずんでいるとは言え、心情の現れと見るには却って無理であろう。この解釈には、事実関係に無理があるばかりでなく、心情と表現の間にも整合性を見出すことはできないのである。

一方（ロ）説は、後に続く“已”との間に矛盾が生じないように「猿が絶えず啼きつづける間に」「猿の声がまだ耳から離れぬ内に」「猿の声のとぎれるひまのない間に」など、意味が通じやすいように、訳文や説明がそれぞれに工夫されている。しかし如何に矛盾なく合理的に説明がなされようとも、それはあくまで日本語における表現論理であって、中国語の表現論理ではない。中国語の言語表現から見れば、“啼不尽”と“已過”の併用が矛盾しているのは明らかである。何故なら、猿は兩岸に連なっている

李白『早發白帝城』の作詩背景について

山々に生息しているから“猿声”は“兩岸（万重山）”と場所的に条件付けられている。つまり“猿声”は“万重山（兩岸）”が尽きた所で尽きるのである。従って（口）説は「猿は啼き尽きていないが、万重の山はすでに過ぎた」の意味であり、これは

* トンネルを通り過ぎていないのに、汽車はもう外に出た

と同等であり、さらに言えば

* 万重の山を通り過ぎていないのに、万重の山はすでに通り過ぎた

と言うに等しい。ここには条件が成立していないのに、条件が成立しなければ出るはずのない結果が出るという明らかな矛盾がある。本来このような未然表現と已然表現の併用が成立するのは、

いつまでも原稿が書けないままに、もう期限が過ぎた
なかなか寝つけないうちに、すっかり夜があけた

のように、二つの並行する事柄で、後者は単に前者の目標時点であって、その条件とはなっていない文であって初めて可能である。だから李白が三峡を下っている時に耳にした“猿声”を、実際にその時点で兩岸で啼いている“猿声”と考える限り（口）説は解釈不能に陥るのである。

これに対し“住”は単に「やむ、とどまる」の意であって、“尽”のような「つきてなくなる」とか「～しつくす」意はない。従って時間的長短にも関係はない。また“住”は猿の声そのものがやんでいるかどうかであって、距離的な長さは含まないので、兩岸に山々が続いているか否かという条件は、本来関係はない。「一声啼き終らない内に」という極端な解釈はここから生れたものであろう。確かに前に動詞を伴わない“不住”や「未

「+動詞+住」は、発話時点において「やんでいない」意であり、時間の長短には関係ない。しかし「動詞+不+住」の形となれば、「いつまで経っても～し終らない」の意であるから、そこには自ずと時間的な長さが付加されるのは否めない。それが「動詞+不+尽」との共通点となって、両者の間に不明確を生じ、“啼不住”と“啼不尽”の解釈が相互に影響しあい、ともに同じ内容の二通りの解釈が生れる結果となったのであろう。“啼不住”は断続性が加わるにせよ「いつまで経っても啼きやまない」意であることに変わりはない。とすれば、“猿声”を現時点で実際に啼いている声であるとする限り、本詩を形成している背景からして、意味内容や論理が矛盾して成立しないこと“啼不尽”同様である。この矛盾を解消するためには、“猿声”を“兩岸”という場所的な条件付けから切り離さなければならぬのである。

この七絶において“已”は、客観的に時間が経過した意味を表す「すでに」ではなく、主観的に時間の経つのを早く感じたことを表す副詞として用いられている。それは「いつまで経っても～し終らない」意の「動詞+不+住」の文脈で用いられていることから明らかである。つまり、単に「三時間経ったから、すでに三時間経った」のではなく、まだ「三時間経っていないと思っていたのに、もう三時間経っていた」意である。このように客観的な長時間を背景に、主観的に短いと感じる表現は、我々も日常の言語生活においてしばしばしている。それは何かに熱中したり、没頭している時、つまり何かに神経を奪われている時である。(ロ)説に対してどこか不合理を感じつつも、その矛盾にまでは気が付かなかったのは、この我々自身による日常の言語体験が、無意識のうちに脳裏の片隅で働いていたからであろう¹⁹⁾。このような状況が、三峡を下る李白に考えられるのは、次の場合である。

1. 次から次へと移る雄大な景色に見とれている内にもう。
2. 猿の声に聞き入っている内にもう。

3. 何か考え事をしている内にもう。

詩句から窺えるのは、あくまで“兩岸猿声”だけである。三峡の景色はそこにはない。もちろん気のあった話し相手がいるわけでもなければ、好きな酒を飲んでいるわけでもない。詩句からすれば“猿声”に聞き入っていることになる。しかし単に猿の声に聞き入っているなら、それは実際に猿の声を聞いているということであって、その場合には“啼不住”と“已”の関係が矛盾するのはすでに見た通りである。だから“猿声”そのものに聞き入っているのではない。詩文に沿って“已”との繋がりが出てくるように解釈しようとするれば、“猿声”を耳にししながら“猿声”と関連ある何かについて考え事をしている場合に限られるのである。とすれば、この“猿声”は悲しみを表す詩語として、昨日までの悲運な境遇を回想しながら、感慨に耽っている表現としか解することはできないであろう。そうすれば次の結句とは自然に繋ってくる。つまり結句“已過万重山”は「ハッと我に返ったら、万重の山々はすでに過ぎて後方にあった」という意味である。猿の啼き声がやんだのは、舟が速いスピードで下っているために李白の耳に届かなくなったのでもなければ、兩岸の山々が尽きた故に聞こえなくなったのでもない。元々啼き声はなかったのである。それに“猿声”は万重の山を通り過ぎると同時にやんだのではない。通り過ぎた後も暫くは耳元に響いていたのである。それが“啼不住”という未然表現と、“已過”という已然表現が矛盾なく併用されている背景である。それは回想による“猿声”の響きが、我に返ったとたんに聞こえなくなったことを示している。詩句の表現にこのような背景があるとすれば、“尽（つきる）”ではなくて“住（やむ）”の方が相応しいことが了解できるであろう。

このように見てくれば、意味的にも論理的にも矛盾する“啼不住”と“已過”の併用が可能であることが了解できるばかりでなく、この矛盾した語句の併用こそこの詩の核心であり、生命であることが理解できるであろう。この三句、四句は言語表現の面からだけでも、“猿声”は実際に啼いている声ではなくて、回想によって脳裏に響いてきた声、少なくとも108ペー

ジで示した形での回想であることは論証できるのである。

従来この三句、四句は、舟足の速さを表現したものととして絶賛を博していた。しかし“啼不住”は完了不可能の表現であり、間接的には、軽舟はいつまで経っても三峡を通り過ぎることはないという意味を表している。それを主観的に時間が経つのが早いと感じる副詞“已”と併用し、この矛盾する語句を感慨の深さの表現として用いたところにこそ、晩年における成熟した作詩技法と、高齢での流罪という悲痛な体験とが一体となった、李白の全身から生れ出た真価を見るのである。舟足の速さは悲しみの深さであった。

六. 朝辞白帝彩雲間

話しが前後したが、ここで起句に返って考えることにしよう。先ず“辞”である。“辞”は別れを告げる意であって、単に別れるとか、その場を離れる意ではない。だから李白の詩には人間、特に第二人称を目的語とした“辞君”がしばしば見られる。別れるに当って、別れる相手に対して、何らかの気持を含んだ言い方である。このことは目的語が場所を表す名詞の場合でも同様である。その場所に偶然行ったとか、たまたまその場所に居合わせたり滞在していたのではない。

『哭晁卿衡』

日本晁卿辞帝都	日本の晁卿帝都を辞し
征帆一片遶蓬壺	征帆一片蓬壺を遶る

阿倍仲麻呂にとって唐の都は生涯忘れることのできない土地であったことは言を待たぬ。

『自巴東舟行經瞿唐峽登巫山最高峰晚還題壁』

李白『早発白帝城』の作詩背景について

月色何悠悠	月色何ぞ悠悠たる
清猿響啾啾	清猿響いて啾啾たり
辞山不忍聴	山を辞して聴くに忍びず
揮策還孤舟	策を揮って孤舟に還る

望郷の念を果たそうと巫山に登った李白は、見えるはずもない遙か彼方の故郷に向かって、見える限りの眺望を目に収め（“極目”）、日の暮れるまで歩き回った（“周遊孤光晩”）。これで再び故郷を目にすることはないと
の思いを胸に、悲哀を帯びた猿の声を耳にしながらか山を辞す時の気持は、
果たして如何ばかりであったろうか。

このような“辞”の用法を見ると、白帝城は李白にとって何かそれなりの
思いがなくてはならないだろう。この点に関しては、「これで蜀の国と
もお別れだ」とする石川氏のみが“辞”の意味を正しくとらえていると言っ
てよい。しかしその場合、今まで故郷に対して心残りなどあっていたのが、
白帝城を出発するに当って気持を改めて、いよいよ門出をするわけである
から、はずんだ気持の第二句へ発展するのは自然であるが、その後で郷愁
を誘われる“猿声”を詠い込むのは、詩としてあまりよい出来映えとは言
い兼ねるであろう。

C説とD説はどうだろうか。C説は漫遊の旅をいよいよ白帝城で切り上
げる意、D説は二度目に故郷を後にする時であるから、A説とは違って今
後はもう故郷に帰れない状況か心境であろう。そうすると“猿声”はどう
なるだろうか。漫遊の旅もしくは故郷滞在が、李白にとって辛いものであ
ったと見れば、精神状態が昨日までの延長上にあるから、回想とするには突
飛で必然性がないし、楽しいものであったとすれば、A説同様結句との繋
りに不自然さが生じる（p.107）のを否定することはできない。

それでは小論が主張しているB説は、背景として、このような言語表現
に当てはまるであろうか。今回の流罪の旅において、白帝城はもちろん目
的地ではない。たまたま白帝城の近くまで来た時に恩赦の知らせを受けた

だけである。また赦免されてから、何かの目的で白帝城を訪れたのでもなければ、白帝城で暫く滞在して、何らかの思い出を残したような形跡もない。それでは何故李白は、白帝城を引き返す時に、殊更別れを告げる表現を採ったのだろうか。言うまでもなく白帝城は、待ち焦がれていた赦免をやっと受けて、流罪地夜郎への旅から、一転して自由の身となって引き返す舟に乗った所である。つまり自分を拘束する身分も、進みゆく方向方角も180度転換したのが白帝城である。白帝城を引き返すことは、とりもなおさず流罪地に背を向けることである。日々待ち望みつつも一度はあきらめた自由の身。それが今や晴れて釈放され、再び自由の身となって流罪地を背にするのである。そう、“辞白帝”とは、流罪地に別れを告げ、罪人の身分に別れを告げる謂であった。それは、はずんだ気持のふんだんに現れている次の承句へ、自然に流れていくものである。

ここで詩題の“早発白帝城”も少しく検討しておこう。“早”には動詞の前に置かれた場合、「早朝」という名詞と、「早く、早々と」という副詞の二通りの用法がある。

『早望海霞辺』 早に海霞の辺りを望む

は前者であるし

『白雲歌，送劉十六帰山』

白雲堪臥君早帰 白雲臥するに堪へたり，君早く帰れ

は後者である。

“早発”の“早”は、どちらでも意味は通じよう。出発したのが早朝であるから、早朝としても間違いではない。早朝の清々しきは、罪人の身から解放された晴れ晴れとした気持を表すに相応しい。しかしその気持は詩

文冒頭の“朝”にも含まれているし、意味的にも“朝”と重複することになる。目的語も同じ“白帝”である。

一方「早々と」の意味に採れば、李白の心情を直接表していることになろう。罪人の身を解かれて自由の身になったので、もと来た道を選ぶためにさっそく出発するのである。これまで流罪の旅でありながら、各地の景勝地で酒を飲みながら殊の外長期間滞在し、行程は遅々として、意識的に進もうとはせず、夜郎へ赴く旅に極力抵抗を示していた李白。尋陽から舟で長江を溯ることおよそ九百キロ、実に一年三ヵ月かけての長旅²⁰⁾であった。それが一旦赦免となるや、故郷の入口まで来ていながら、間髪を入れずに、三分の一余りの千里の距離を一気に還るのである。自由の身となった喜びを実感として味わうには、流罪地夜郎から少しでも早く、少しでも遠くへ離れるに越したことはない。“早”は李白のはやる気持の現れであるかも知れない。

詩題と起句は、引き返し地点“白帝城”を共通の目的語とし、文構造に違いを持たせ、二つの異った動詞で意味に変化を与えて、自己の心情を、自由の身になった喜びと、白帝城を背にすることの嬉しさという両面から照射している。“早発”で、はずんだ気持で自由の天地に出発する喜びを、“朝辞”で、清々しい気持で流罪地と別れる嬉しさを。そしてその喜びの心情を持って、一気に承句に入っていくのである。そこには重複による饒舌さや単調さは微塵もない。詩題は、作者の心情を包括的に表していると同時に、詩文導入の役割をも果たしているのである。それは“早発白帝城”と“朝辞白帝”とを入れ換えてみれば、一層明白に了解できるであろう。“朝辞白帝城”を詩題とした場合、結句との関連が生きずに、詩全体を包括できなくなるからである。

次に“間”について考えてみよう。中国語の方位詞は、“前、後”のように、古典語から現代語に至るまで、空間と時間を兼ねるものが幾つかある。“酒樓前”“他人後”は空間であり、“日前”“酔後”は時間である。“間”

も“空間、時間”という単語自体が示すように、空間と時間の双方を兼ねている。“花間”は空間であるし、“春間”は時間である。“其間”は“其”が指すものによって空間を示す時もあれば、時間を指すこともある。とはいえ、上の例からも解るように、これら方位詞は、一般名詞と組み合わせさせた時には空間を指し、動詞や時間名詞と組み合わせさせた時には時間を指すのが普通である。李白の詩にもある“雲間”は空間であって時間ではない。とすれば当然“彩雲間”も空間を指すことになる。しかし“彩雲間”は、文脈によっては時間を指すことも可能である。それは“雲”が総称としての、また一般概念としてのクモであるのに対し、“彩雲”は、早朝もしくは夕方という限定された一時間帯の現象だからである。この外“雨後”や“身後”なども、一般名詞が一種の時間帯として用いられた例と言えよう。現代中国語においても、一般名詞がある時間段階に用いられた場合には“了”を伴うことは、広く知られた言語事実である。

眼下是新社会了 今や新しい社会になった

*眼下是社会了

他已经是高龄了 彼はもう高齢だ

*他已经是一年齡了

従ってこの七絶の“彩雲間”には、空間と時間の二通りの解釈が存在している。

イ) 朝焼け雲の出ているあたり——朝焼け雲に映える白帝城

ロ) 朝焼け雲の出ているあいだに

このように空間説は、白帝城が朝焼け雲の中に佇んでいる光景としてとらえている。もちろん実際の光景はその通りであろう、多分。しかし言語表現は果たしてそうだろうか。平仄か何かの関係で“白帝”と“彩雲間”が倒置されているならそれは正しい。“彩雲間”と“白帝”は修飾関係になるから。

『贈裴司馬』

若無雲間月 若し雲間の月無くんば
誰可比光輝 誰か光輝を比すべき

しかし倒置法でないとすれば、“彩雲間”は前の語句全体に拘ってくるから、動詞（“辞”）の動作主体（主語）との関係が主となり動詞の目的語（“白帝”）との関係は間接的となる。

『関山月』

名月出天山 名月天山より出ず
蒼茫雲海間 蒼茫たる雲海の間

もちろん“天山”は“雲海間”に聳えている。しかしこの表現では“雲海間”にあるのは“名月”であって“天山”には焦点が当てられていない。これは“名月”が主語であるからこそ、その空間に存在するものとしての意味が出るのである。“天山”と“雲海間”は単に状況関係であって、文法関係でもなければ意味関係でもない。次の例。

『永王東巡歌』六

丹陽北固是呉関 丹陽北固，是れ呉関
画出楼台雲水間 楼台を画き出す雲水の間

この句では“楼台”は“雲間”という空間に存在することを表している。しかも“画出楼台”は“辞白帝”と同じく文法的には動賓関係である。しかし“楼台”は結果目的語であり、“白帝”は『関山月』の“天山”と同じ場所目的語であって、両者の意味関係は同じでない。中国語では文法関係は同じであっても、その下位分類である意味関係は多様性に富んでいるから、文法関係が同じだからと言って、意味関係までが同じだとは限らな

い。だから“朝辞白帝彩雲間”の“白帝”を、朝焼け雲の中に佇んでいる白帝城とすることはできないのである。ましてやこの白帝城が、流罪地夜郎の代替地として用いられているとすれば、白帝城を美しく飾る空間としての“彩雲間”は、なおさら似つかわしくないであろう。この外にも、“彩雲間”を時間とする理由を、いくつか挙げることができる。

1. 詩全体が時間の流れの上に立っている。
2. “白帝、江陵、兩岸、万重山”等場所を表す名詞は、全て時間の流れの中に詠い込まれている。
3. 時間とした方が、承句との繋がりが出てきて、詩全体の中で収りがよくなる。
4. “朝”の清々しさは、“彩雲間”により、晴天で太陽の出る前の清々しい気持として、より一層明確になっている。
5. “朝”は漠然とした早朝であり、“彩雲間”によってその時間帯が限定されるので、意味上の重複は起こらない。
6. “彩雲間”を空間とした場合、詩の内容に付与される意味を見出すことができない。

つまりこの一句は、朝焼け雲の出ている中を白帝城に別れを告げた、という意味になるのである。

注釈家たちの多くは、白帝城の「白」と、朝焼け雲の「赤」との色彩対比を指摘する。李白が作詩段階においてそのことを意識していたのか、結果として偶然そうなったのか、遺憾ながら門外漢の筆者には、判断が付き兼ねている。しかし、若しも果たして、李白がそのことを念頭においてこの七絶を作ったとするなら、鮮やかな色彩対比としてではなく、一種の象徴の対比として用いていると見ることもできよう。それは“白”は古来中国では凶事の象徴で、白帝城は今正に背にしようとしている流罪地の方角であり、“彩雲”が出ている方向はこれから向かおうとしている自由の地の方向で、呉小如氏の指摘²¹⁾にもあるように、暗闇から明るくなる時間

李白『早発白帝城』の作詩背景について

的転換点だからである。

七. 千里江陵一日還

今までにもしばしば指摘されてきたように、この一句は『水経注』や『荊州記』の記事を踏まえたものである。両者の言語表現には大差がないから、今は『水経注』巻三十四の関係部分を引用しておこう。注釈書には冒頭の二字“有時”を省いているものが多い。

有時朝発白帝暮到江陵，其間千二百里，雖乘奔御風不以疾也。

朝に白帝を發ち暮に江陵に到る時有り，その間千二百里，御風に乘奔すといえども以って疾しとせず。

白帝城から江陵までおよそ350キロ²²⁾，三峡の流れの最大流速は大体24キロ²³⁾。単純に計算しても優に14時間はかかる。万重の山を通り過ぎれば舟足はぐっと遅くなる。それに長時間に亘る急流の手動作運行は，船頭の休憩もしくは交替を考えなければならないから，どんなに早く見積もっても16、7時間は要しよう。ここはやはり石川忠久氏²⁴⁾の指摘にもある通り，これは当時の言い習わしであり，実際には2、3日かかっていたと見るのが穏当のようである。しかし『水経注』の記事に“有時”とあるのは，それが単なる言い習わしではなく，“朝発白帝暮到江陵”が事実であったようにも筆者には受けとれる。それは“有時”の単用は，後置修飾語で示される出来事が特殊な例外的な事例であることを表すために，却って事実性が付与されるからである。“有時”から次のことが解る。

1. いつもは二日以上かかっていた。
2. しかしその日の内に到着することもあった。

後者の可能性として考えられるのは，

1. 雨季で水嵩が増し，流れが早くなった時期。

2. 政治的もしくは軍事的に緊急を要する事態が発生し、早馬を継ぐが如く舟を継いで江陵に到着する事例が、不定期ではあるが実際にあった。

この二点である。後者の場合は、実際に起こった出来事であるから、他の史書が何かに何らかの記事が残るであろうが、前者の場合は、定期的な現象であるから、“有時”ではなく何か特定の時期もしくは条件を表す語句が用いられている筈である。そう思って“有時”に対して些かの疑念をもって『水経注』と『荊州記』を繙いて見ると、今まで何故か取り上げられることがなかったのであるが、『水経注』にも『荊州記』にも“有時”の直前には、次のような一節が厳然として記載されているのである。これを見れば“有時”の意味は明らかである。

至於夏水襄陵沿沂阻絶，或王命急宣有時……

夏水襄陵するに至れば沿沂阻絶し，王命急宣されれば……の時あり

これは三峡地帯の山が、天を覆うほどに険しく高いなど、その地勢を述べた直後に続く文であるから、「夏に水嵩が増し、水が陸を覆うようになると、舟の往来は途絶えてしまう」ことが一つ。「緊急の王命があれば……の時もある」ことが一つと、その急流のさまを、舟の運行という現象を用いて具体的に述べた文である。この“有時”の用法からすれば、王命が下った時には、一日で江陵に着くこともあったこと、裏を返せば、たとえ急を要する王命が下ったとしても、一日で到着するのは常ではなかったことが知れるのである。一日で到着することにはあったが、やはりそれは稀であった。それに加えて李白が高齢であったことを考えれば、その日の内に江陵に到着したとは、到底考えられないであろう²⁵⁾。それに李白の当時の心情を考えれば、何もわざわざ実際に江陵まで還ったと考える必要など更々ないのである。解放の喜びを実感として早くしっかりと噛みしめたいという気持と、長時間に亙る急流下りの後であることを考えれば、む

しろ万重の山を通り過ぎて、最初の寄港地で上陸したと見る方が自然ではないだろうか。第一、李白の乗っていた舟自体がそこで停泊した可能性が高いである。それに赦免後の落ち着き先は江夏、漢陽地区であって、安陸地方には足を向けていないという松浦氏の論証²⁶⁾もある。そのような意味において、“還”を「還りの舟」とする説も、「還」などという言葉は、それほど厳密なものではない」と見る見解も間違いではない。ただ李白にとって真実重要なことは、江陵になど還ることではなく、拘束された身分から解放される自由の天地へ還ることであった。だからここでは、当時の言い習わしを用いて、自由の土地へ還る喜びを、「江陵に還る」と表現したのである。白帝城も江陵も、共に一種の象徴代替として用いられていたのであった。

事実と言語表現との間にこのように一定の距離があるとすれば、李白が舟に乗った所は、必ずしも白帝城でなくともよいことにもなるであろう。実際赦免を受けた所は巫山の近くであって、そこから白帝城までは更に30キロの行程を、曳き船で遅々として溯らねばならず、李白にそのような必要など全くないからである。李白にとっては、一日でも早く自由の土地へ還ることこそ望むところであった。このように、本詩を構成する基本的要素である出発地と目的地が、共に実際の場所ではなく、地名が象徴的に用いられているとすれば、その付随的要素である“彩雲”も同じ視点で見なくてはならないだろう。少なくとも、一度はその視点で見ておく必要があらう。つまり“白帝城”も“江陵”も“彩雲”もすべて李白の心情を表すために用いられているとすれば、先に疑問を呈しておいた“白帝”と“彩雲”による「白、赤」の色彩による象徴表現の対比の可能性も、あながち否定できなくなるからである。正に李思敬氏²⁷⁾の言にもあるように、李白の詩は、他の詩人が“見景生情”であるのとは対照的に、“因情見景”と言うことができよう。

この一句を巡って、李白はすでに江陵に到着しているか否か議論がある

が、結句よりして、まだ到着していないことは明白である。このような議論が起こるのは、中国語には時制がないことに起因する。その時点を確認するには、単にその文（句）だけからではなく、前後を含めた文脈（詩全体）から判断しなければならないのは、現代中国語同様である。詩全体の前後関係や事実関係からすれば、この一句は、李白の乗った軽舟が白帝城の船着き場を離れて間もなく、舟が三峡の流れに乗って下り始めた頃の、江陵到着時に思いを馳せた李白の心情とるのが自然である。ここで各句の時間的な位置付けを示しておこう。

起句：白帝城で舟に乗った直後、もしくは舟が岸を離れ始めた頃

承句：舟が軌道に乗って三峡を下り始めた頃

転句：三峡を下っている間中

結句：舟が三峡を通り過ぎて間もない頃

如何であろうか。このように見れば、本詩における時間的経過は、李白の移動に沿って、平凡に過ぎるほど自然なものとなってくるのである。

それでは最後に、詩全体の意味を、まとめて整理しておこう。

朝辞白帝彩云间

早朝、朝焼け雲の出ている間に、白帝城に別れを告げよう。これで流罪の身ともお別れだ——現時点での晴れ晴れした気持

千里江陵一日還

さあ、今日の暮れには千里先の江陵に還り着くことができるぞ。そうすれば本当に自由の身になれるのだ——未来へのはやる気持

两岸猿声啼不住

喜びに浸りながら两岸に連なる山々を眺めていると、昨日まで夜な夜な啼いていた悲しそうな猿の声が脳裏に蘇ってきて、感慨もひとしおである。アア、あのまま夜郎に流されていたら、二度と再び生きて還ることはできなかつたらう——昨日までの境遇と心境を回

想しながら、感慨に耽っている。

軽舟已過万重山

ハッと我に返ってみると、舟は安定した流れに乗ってゆったりと進んでおり、猿の啼いていたあの万重の山々はもう通り過ぎて後方にあった——再び現時点に還り、自由の身になった喜びを実感として味わっている。

通称三峡と呼ばれている南津関から白帝城までは、流罪地夜郎への行程中最大の難所である。赦免を受けた喜びを表す本詩は、その最大の難所を引き返す方向で、起点白帝城から終点南津関に焦点を絞り、南津関を通り過ぎた所で強い余韻を残して終っている。虎口を脱した、と言う比喻は必ずしも適切ではない。しかし高齢の李白にとって、遠流の旅は死への旅である。その死への旅の最大の難所の出口南津関を出たところで、それに類似した気持が心底から湧いて来たところで不思議はない。起点の白帝城では、赦免された時の浮き立つ喜びとはやる気持を表し、三峡を引き返している間はずっと回想場面とし、三峡を抜け出たところで、生きて自由の身となった現実に、ほっと安堵をした落ち着きのある喜びに浸っている表現となっている。実際上にも精神的にも苦難の行程であった三峡のもう一つの言い方“万重山”は、李白の心痛、悲痛を表す象徴表現と見れぬことはない。最大の難所を背景とした人生最大の悲痛への感慨と喜び。その手腕には他の追従を許さぬものがある。鮮やかと言う外ない。

八. おわりに

従来はどの年代説を採るにしろ、“猿声”は舟足の速さの表現として高い評価を受けていた。つまりこの七絶の生命は、舟足の速さを“猿声”で表したところにあったのである。

写出瞬息千里，若有神助。入猿声一句，文勢不傷于直。（『唐詩別裁』）
 瞬息千里を写し出し，神助有るが若し。猿声の一句を入れ，文勢直に傷つかず

但言舟行絶快耳，而妙在第三句能使通首精神飛越，若無此句，将不得為才人之作矣。（『札朴』）

但舟行の絶快なるを言うのみ，而して妙は第三句の能く通首をして精神飛越さすにある。若し此句無かりせば，将に才人之作と為すを得ず。

しかしこれは作詩における技術面に焦点を当てただけに過ぎない。もちろん五十九歳赦免説は，赦免された喜びの心情が託されていることにも言及はされている。しかしこれとて赦免を受けた所が，たまたま流れの速い三峽地帯であったという偶然性から完全には脱却していない。二十五歳頃の作詩技術が未熟な年代でも，実際に兩岸一帯に昼間猿が啼いている環境があれば，偶然このような詩を作ることもあり得るであろう。赦免説が多くの支持者を得ながらも，「全体の味わい」とか「全体にみなぎる力感」を基盤として，従来より「猿声」に悲しみを見，更に近年“還”に「行く」意味を見い出した二十五歳説が勢いを盛り返しつつある²⁸⁾ 所以であり，二十五歳説とともに俗説として退けられる²⁹⁾ 所以でもある。従来赦免説は，“猿声”を詩語として見る視点に欠けていた。今，“猿声”を，悲しみを表す詩語として，回想により脳裏に蘇ってきた声と採れば，他の語句もその意味が一層明瞭になって，一語一語が輝き出し，詩句と詩句とが互いに響き合って，詩全体が一個の生命体と化し，生き生きと躍動し始めるのである。

この詩には対句が用いられていない。しかし前半の二句で，朝焼け雲の出ている早朝の清々しさと，当時の言い習わしによる三峽の流れの速さを基礎に，高ぶる喜びを表現し，後半の二句では，詩語“猿声”を中核に，客観的な長い時間と主観的に短い時間を表す矛盾した語句を併用することによって，悲嘆の深さを表現し，二つの相反する心情を対置させている。

それは喜びや悲しみを直接表す語による対置ではなく、間接表現による対置である。そこには高度な技巧を要する対句以上に高度な技術を用いながらも、言葉は三峡の流れに乗って自然に流れ、その人工的、知的な技巧を感じさせるところが全くない。そればかりか、喜びと対置させることで悲しみをより深め、悲しみを深めることによって、そこから抜け出した喜びを一層高めるといふ相乗効果さえ現れて、詩全体にふくらみを持たせる結果となっている。晩年の成熟した技法と、深い精神体験が、李白の体内で溶け合い、自然に醸酵して生まれた唐代屈指の名編と言えよう。これと同じ時期（同日？）³⁰⁾に作られた同じ七言絶句『峨眉山月歌』とともに、古今の絶唱と称される所以である。

付記：今夏三峡下りをしたところ、秭帰で思いがけず船頭さんから当地に伝わる船歌を聞かせて戴く機会を得た。彭振浩氏より歌詞を戴いたので、ここに記し謝意を表したい。

船工号子（西陵峡）

西陵峡上灘連灘，岩对岩来山連山。
青灘泄灘不算灘，崆嶺才算鬼門関。
船過西陵人心寒，一声号子下青灘，
一声号子一身汗，一声号子一身胆。

注

- (1) 松浦友久『李白一詩と心象』1984年 p. 35
- (2) 岡村繁「李白『峨眉山月歌』考—李白の出蜀経路とその詩想開眼—」（『荒木教授退休記念・中国哲学史研究論集』昭和56年所収）
- (3) 松浦友久編『校注・唐詩解釈辞典』1987年 p. 701～703
- (4) 石川忠久『漢詩の世界』昭和53年（初版は昭和5年）p. 85
前野直彬『唐詩選』下 昭和38年 p. 146
- (5) 青木正児『李白』 昭和40年 p. 257

- 目加田誠『唐詩三百首』3 1975年 p.64
 周勳初編『唐詩大辞典』1990年 p.708
- (6) 康懷遠「《早發白帝城》写作時間質疑」(『社会科学戦線』1982.4所収) p.290
 中島敏夫『中国名詩鑑賞』5 昭和53年 p.61
- (7) 李從軍「李白蜀考」(『社会科学戦線』1982.4所収) p.288
- (8) 前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』昭和45年 p.280
 斎藤响『唐詩選』下 昭和40年 p.256
- (9) 松浦友久「「猿声」考」(『詩語の諸相』—唐詩ノート—1981年 所収)
- (10) 注(13)と同じ。
- (11) 延原大川『新唐詩選』下 昭和40年 p.285
 猿声哀絶、急流険悪、異郷の風物は李白の旅愁をして、更に惨愴たらしめたのである。「輕舟已に過ぐ万重の山」と、如何にも輕快に叙し去っているが、重ねて諷誦すれば、彼が胸中の哀愁は余韻を長く引いている。
- (12) 劉光然「早發白帝城」(『中国歴代詩歌鑑賞辞典』1988) p.393
 王運熙・李宝均『李白』1979年 邦訳書 p.154
- (13) 石川忠久上掲書 p.85
 石川忠久『漢詩紀行』 1991年 p.28
 石川忠久『漢詩の魅力』1993年 p.53~58
- (14) 岡村繁上掲論文によれば、李白が蜀を出た経路は、一般に言われているように三峡を下ったのではなく、北路を通って漢水の上流へ出たとの論考があるが、しばらくは通説のまままで本稿を進める。
- (15) 神戸大学助教授鈴木信彦氏談。
- (16) Robert Hans van Gulik『*The Gibbon in China. An Essay in Chinese Animal Lore*』1967年 邦訳書 p.209
- (17) D. W. マクドナルド編『動物大百科3 霊長類』日本語版 1986年 には夜明けごろかその直前にオスが鳴き、オスとメスの歌いあいはい1日平均15分(p.126)。行動時間は9~10時間で、35%は採食、24%は移動(p.125)とある。フーリク氏の上掲書には、歌いは朝夕の約30分。午前中の大半は食事に費やし、昼近くになるとみな集って長い午睡をとる(p.20)とある。両書ともに季節への言及はなく、『水経注』の“霜旦”との間に食い違いが見られるが、現在テナガザルは熱帯地方の動物となっており、北緯35度の黄河流域まで生息していたのは1,000年前まで(『動物大百科』)もしくは14世紀まで(フーリク氏)と見なされているから、或は地域的な違いによる環境の差があるのかも知れない。正確なところは不明である。またフーリク氏がアジルテナガザルであると断言するのは、画家の描いた絵を根拠としているから、直接アジルテナガザルを目にした画家は多くない(フーリク氏の挙げるのは易元吉、牧溪の2名)こと。文学資料に見える、中国の四分の三とい

う広大な地域に生息していたテナガザルを、易元吉の絵4枚と牧溪の絵1枚によって、9種（フーリク氏は亜種を入れて6種に分類）いるテナガザルの1種に限定して（p.172, 209）よいのか、素人ながらの疑問は残る。しかし本稿の目的はそれを明らかにすることではない。本稿としては、唐詩に見る“猿”が、基本的には「夕暮-夜-早朝」に啼くこと、啼く時間はほぼ一定しておりそんなに長くはないこと、この二点を確認すれば十分であろう。

(18) 自三峡七百里中两岸连山略无阙处，重巖疊嶂隱天蔽日……

(19) 次の一文を見ると、中国人においても同様の状況があることが窺える。

第三句の境界更為神妙。古時長江三峡，“常有高猿長嘯”。然而又何以“啼不住”了呢？我們不妨可以聯想乘了飛快的汽車于盛夏的長昼行駛在林蔭路上，耳聽兩旁樹間鳴蟬的經驗。夫蟬非一，樹非一，鳴声亦非一，而因車行之速，却使蟬声樹影在耳目之間成為“渾然一片”，這大抵就是李白在出峽時為猿声山影所感受的情景。（吳小如，注⑳に同じ）

(20) 松浦友久『李白伝記論』1994年 p.321～322

ただし松浦氏は、行程が遅いのを李白の余裕と見る。恩赦が下るのを確信している間はそうである。ただそのためにも故意に遅くしたと思われるのである。

(21) 吳小如「早発白帝城」（『唐詩鑑賞辞典』1983）p.337

“彩雲間”也是写早晨景色，顯示出从晦冥轉為光明的大好气象。而詩人便在這曙光初燦的時刻，懷着興奮的心情匆匆告別白帝城。

(22) 松枝茂夫『中国名詩選』中 1984年 p.322

出所は不明であるが、350キロという数字は実測であるという。

(23) 石川忠久、前野直彬『漢詩の解釈と鑑賞事典』1979年 p.138

但し25キロ説、28キロ説等があるが、これは季節の違いによるものと思われる。

(24) 石川忠久『漢詩の世界』同上 p.84

(25) よく引合いに出される杜甫の『最能行』“朝発白帝暮到江陵，頃來目擊信有徵”は“目擊”や“信有徵”からして、これは杜甫が三峡の急流を目の当りにして抱いた感想であることは明白である。体験ではない。

(26) 松浦友久 上掲書 p.355, 326

(27) 李思敬「独坐敬亭山」（『李白詩歌賞析集』裴斐主編1988年）p.172

(28) 石川忠久『漢詩の魅力』1993年 p.53～58

目加田誠『唐詩選』平成8年 p.177

(29) 中島敏夫、佐藤保『唐詩選』下 昭和60年 p.272

(30) 『峨眉山月歌』の作詩年代に関して、通説のように李白が初めて故国蜀を出た時の作ではなく、夜郎流罪の途上であるとの最初の論考は、岡村氏の上掲論文である。筆者は氏の論文から様々な示唆を受けた。これを基に筆者の考えを述べることにしよう。

“半輪”の“月”が岡村氏の指摘の通り、李白の意中の人を指しているとするれば、二句目の“影入平羌江水流”は、その人も自分と一緒に江を下って欲しいと思う李白の願望か、もしくはその人も自分と一緒に江を下ってついに行きたいと思ってきているはずだ、という期待感であると解される。水面に映っているのは月である。それを“影”で表したのは、意中の人を面影を念頭においたものであろう。そこで本詩は赦免前ではなく、赦免後の作である理由を述べよう。三点ある。

1. 夜郎へ行くには、なお長江を溯らなければならないから、第三句以下の下る描写とは矛盾する。
2. 夜郎へ行くには、長江を渝州近くまで遡らなければならない。渝州は赦免を受けた巫山からは更に幾日もかかる行程であるし、故郷の蜀へはいよいよこれから足を踏み入れるわけであるから、詩の内容からして詠むのが少し早すぎる感がある。このような詩を赦免前に詠む場所としては、家郷へ最も近づいて再び家郷から離れる所、つまり渝州付近の長江から左へ折れる辺り（涪陵？）が最も相応しい。結句の“下渝州”も生きてくる。
3. “夜発”は赦免の知らせを受けた夜に故郷を出発するのを脳裏に描き、三峡を目的地（“向三峡”）としながら、三峡の入口白帝城よりかなり手前の“渝州”で終わっているのは、朝になって現実に返った時に、冷酷な現実を直視するのを避けて、含みを持たせたと受け取れよう。

問題は詩中に見る“秋”である。これが赦免を受けた春三月と矛盾する。この点に関しては“秋”は意中の人を年老いたことを表すと採れないだろうか。“秋霜”は“白髪”の比喩（『秋浦歌』十五）として用いられるし、“秋髮”（『古風』十一）という語もある。この詩の“秋”は限定語ではない。月の被修飾語（半輪秋）であるから、比喩的に用いられている可能性はより大きい。岡村氏が“秋”を“愁”に掛けているのは、会いたくても会えない“愁”だけでなく、若い時に別れて以来、会わないままに年老いたこと、そして年齢からして、もはや永遠に会う日は訪れないだろうという“愁”も含まれているように思われる。だからこの月は“半輪”であり“秋”なのである。

このように考えれば、前半二句は李白の期待感を表し、後半二句はその期待とは裏腹の冷酷な現実を述べたものとなる。これもまた相反するものを対置した“因情見景”の詩である。

この詩は赦免を受けた夜の心情と、翌日朝を迎えて現実に返った時の気持が一体となっている。これは恐らく、李白が“兩岸猿声”を脳裏に響かせながら三峡を引き返している時に、昨夜からの続きとして、意中の人に思いを馳せて作った可能性は十分ある。『早発白帝城』と『峨眉山月歌』は、三峡を下る軽舟の中で、ほぼ同時に作られたのかも知れない。とすれば、この二つの七絶は、赦免に遭った喜びと、赦免なるが故に、遂に故郷に足を踏み入

李白『早発白帝城』の作詩背景について

れることができず、会いたい人にも会えなかった寂しさを表す、二首の対詩
ということができよう。同じ出来事を基に、相反する心情を表した姉妹詩、
それが古今の絶唱と称されている『早発白帝城』と『峨眉山月歌』である。